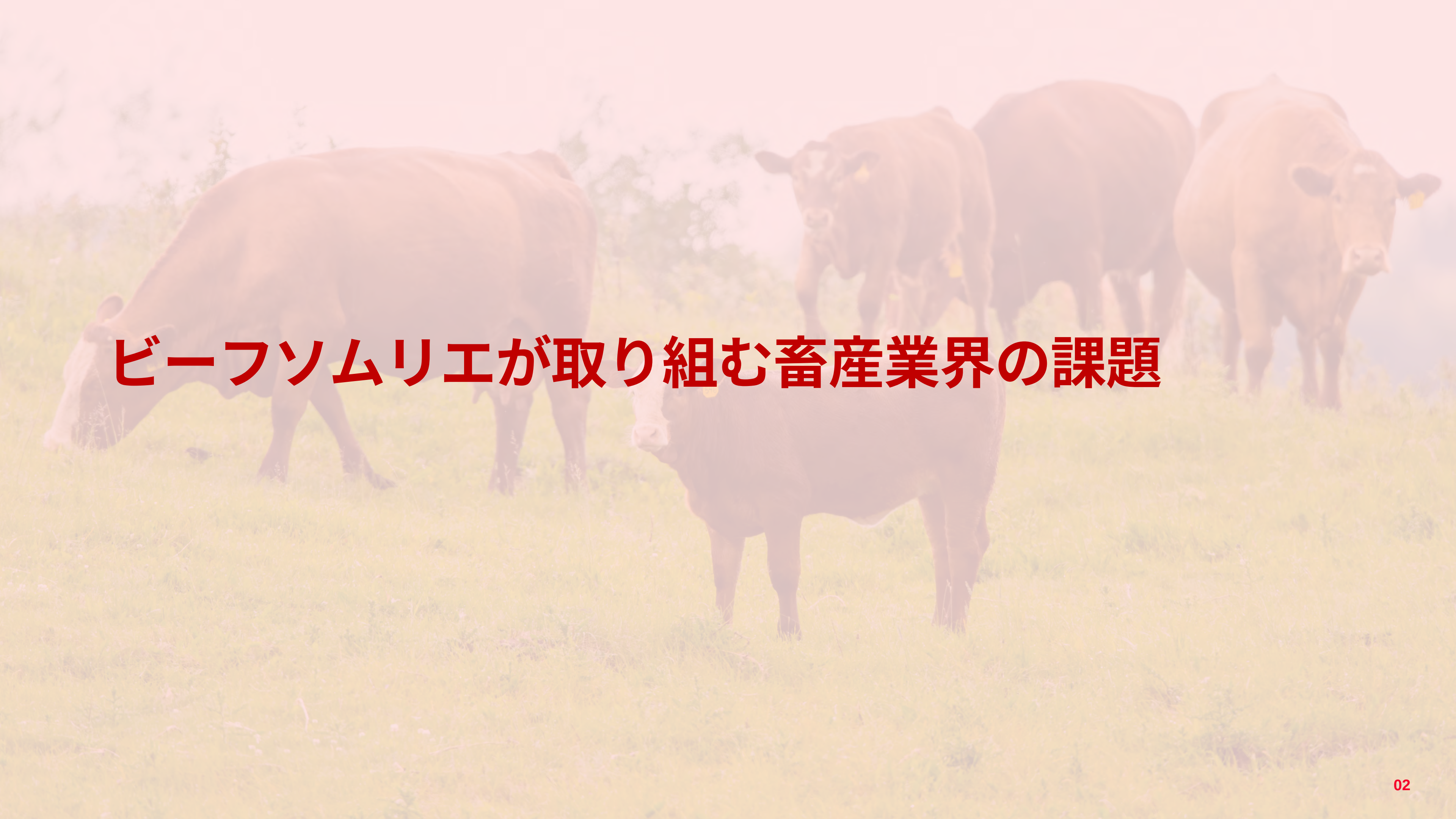




世界初の畜産「内的データ x AI」 データプラットフォーム

B-som診断で、肥育の意思決定を科学的に最適化



ビーフソムリエが取り組む畜産業界の課題

日本の畜産業の持続性が危機的な状況に置かれている

流通の課題

枝肉単価が横ばい

ブランド和牛の乱立

A5等級が溢れたことで、ブランド牛が無尽蔵に増えている（320種類以上）
その結果、ブランド牛の違いが
分かりづらくなってしまった

見た目とおいしさの評価の混同

格付けとは 見た目の評価 であり、
おいしさ（≡品質）を 評価するものではない

生産の課題



年5%の離農率
(直近10年間で約4割減少)

経験と勘の限界

再現性の難しさ

畜産の現状：データではなく「外から観察できる情報」に依存

取得可能な「外的データ」の例

 体重 / 月齢

 血統

 飼料

 飼育環境

 外観 / ブランド

 枝肉格付け

畜産業界には、まだ使われていない
巨大なデータ領域がある

外側からは見えない内部の代謝や筋肉の形成プロセス
は、これまでの経験に依存

既存の畜産スタートアップの多くも、アプローチしやすい
外的データ領域に集中している

「生体内の情報」はほぼ使われていない

再現性を高めるために「内的データ」による変革が必要

現在・他スタートアップ

外的データ

体重・月齢

血統

飼料・環境

外観・ブランド

× 結果を予測できない

「出荷してみないと分からない」というギャンブル性が残る

× 効果検証が困難

飼料を変えても、その影響がいつ、どう出たか特定できない



- 結果から検証することしかできない
- 不確実性が高く、再現性が低い

ビーフソムリエ

内的データ

血液代謝情報

筋肉状態・脂肪形成

栄養状態

肉質予測

◎ 出荷後の肉質を直接予測

枝肉になる前の生体段階で、格付け等級を高精度に予測

◎ 体内構造の把握

筋肉や脂肪の付き方を内部から可視化

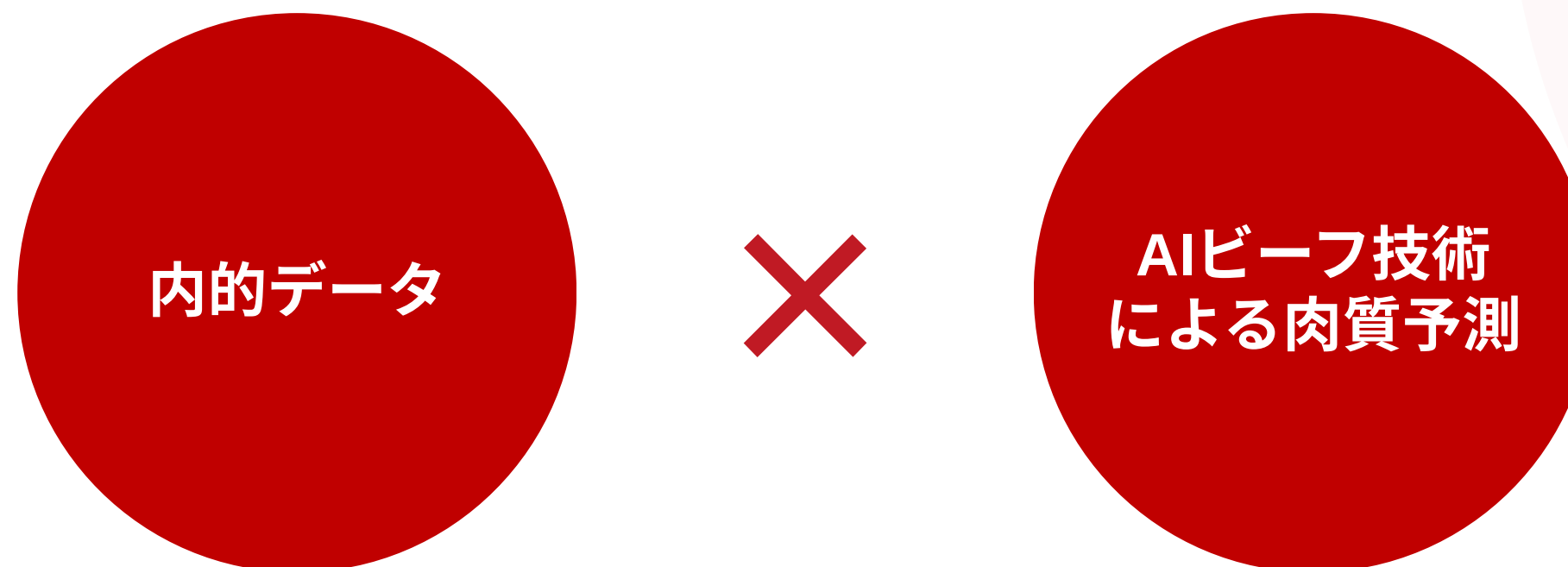


- 結果を予測し、調整が可能
- データに基づく高い再現性

A photograph of a herd of brown cows in a green field, overlaid with a semi-transparent light orange filter. The cows are of various breeds, some with white markings on their faces. They are standing in a grassy field with some trees in the background.

ビーフソムリエが実現する データ×テクノロジーによる変革

ビーフソムリエが可能にする「データ × テクノロジー」による畜産



血液データ取得

生体からの直接サンプリング



質量分析

代謝物質の精密測定



内部状態データ化

生物学的情報の可視化



科学的に最適化

データ駆動型の畜産へ

AIビーフ技術：

AIによって遺伝子の発揮度を分析し“出荷時の肉の量と質”を予測
肉用牛の定量評価ができる（近畿大学が開発）

ビーフソムリエだけが内的データを扱える

データ収集自体に巨大な参入障壁

データそのものが存在していないため、
内的データにアクセスできるプレイヤーは
存在しない

AI企業は参入困難

物理的なインフラへのアクセス経路が必須
アルゴリズムだけでは容易に構築不可



牧場ネットワーク

農家との信頼関係に基づく採血許諾。新規参入者が
一から構築するには数年を要する



獣医師による採血

専門的な手技と衛生管理が必須。
遠隔やAIでは代替できない物理的作業



高度な分析設備

質量分析装置による精密測定。
大学研究拠点との連携による分析精度



個体追跡システム

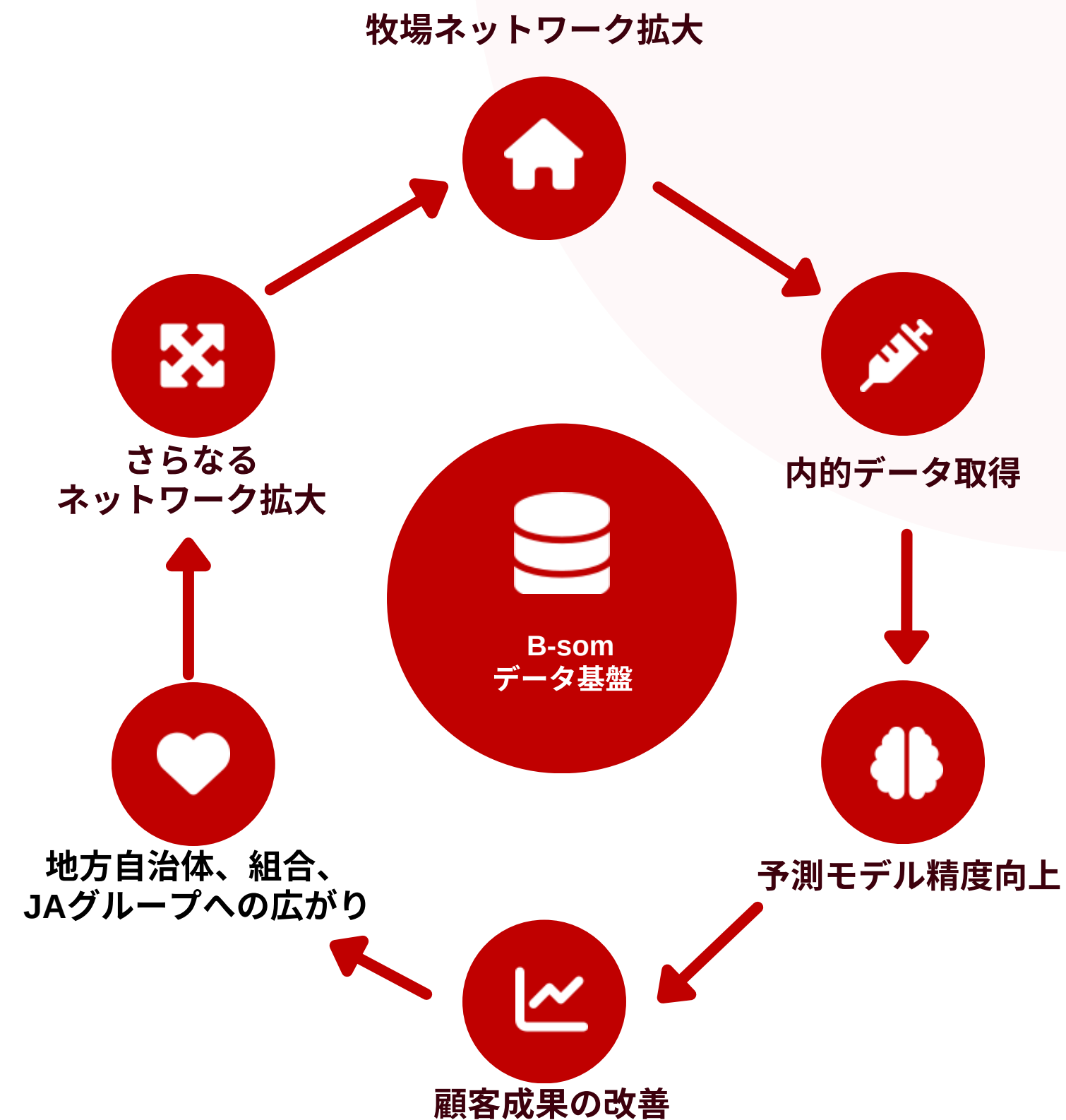
出生から出荷まで一貫した個体IDによるデータ紐付け

データが増えるほど、優位性が加速する

競争優位の核（モート）

データ量 × 予測精度 = 時間経過とともに強化されるモート

- 1頭分のデータが増えるたびに、予測モデルの精度が上がり、後発の追従をさらに困難にさせる
- 後発が同等データを再取得するには、年単位の物理的作業が必要



A photograph of a herd of brown cows in a green field. In the foreground, a small calf with a white face and a yellow ear tag stands facing the camera. Behind it, several adult cows are grazing or standing. The background is a soft-focus green field with some trees in the distance. The overall lighting is bright and slightly hazy.

現在の取り組み

現在の主な取り組み

1

飼料開発

対象

飼料メーカー

価格イメージ

¥200–500万／牧場

提供価値

新飼料の開発サイクルを革新
従来20ヶ月かかっていた検証期間を
2–3ヶ月へ劇的に短縮

2

肥育予測診断

対象

牧場

価格イメージ

¥1～3万／頭

提供価値

自家産飼料の検討
枝肉重量の向上
ロース芯面積の向上
皮下脂肪厚の低減

3

JAと取組中

対象

JAひろしま、JAえひめ、JAしまね
JAみやざき（話合中）

価格イメージ

実証中

提供価値

肥育予測から添加剤の効果検証
ブランド牛の差別化/高付加価値化

① 飼料会社への導入結果

飼料の開発において、高いROIを実証

検証期間

~~20ヶ月~~ → **2～3ヶ月**

約85%の期間短縮

飼料開発コスト

5分の1

従来比で大幅な削減

開発サイクル速度

10倍速

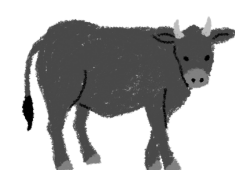
製品開発サイクルの革新

抱えている課題

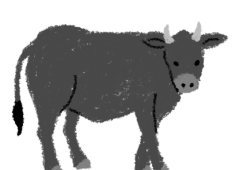
- 飼料の効果検証には長い月日が掛かっている
- 同じ飼料でも各牧場によって効果が異なる

子牛
(10ヶ月齢)

今まで

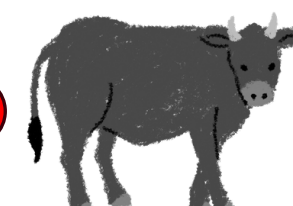


新しい肥育



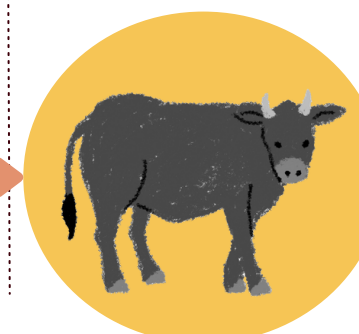
肥育期間 (約20ヶ月)
“20ヶ月後”の出荷時に評価

出荷

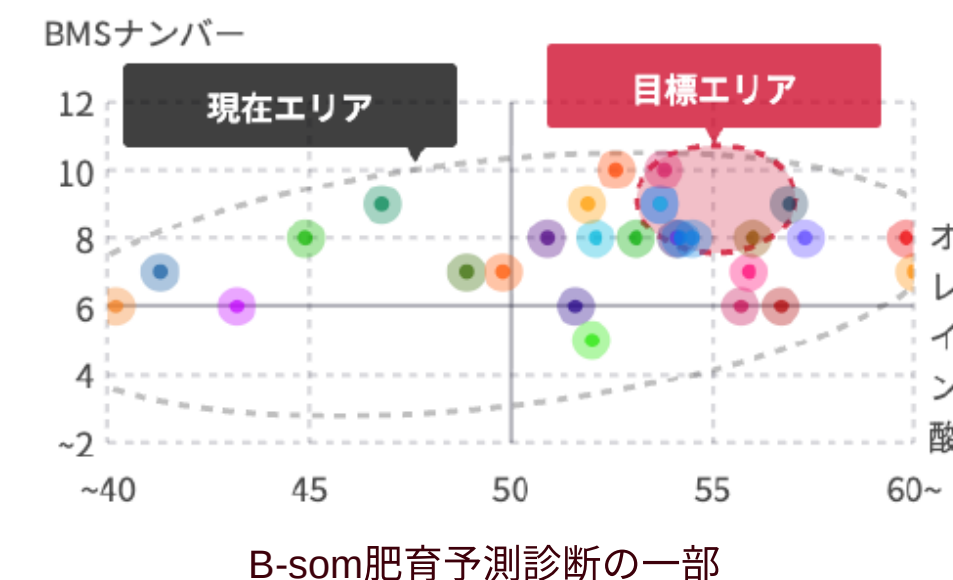


“2-3ヶ月後”に評価
(肥育成績の向上を確認)

B-som診断実施



質Pick Up BMSナンバー×オレイン酸



② 牧場への導入結果

枝肉重量の改善率を実証

検証期間

~~20ヶ月~~ → **2～3ヶ月**

約85%の期間短縮

枝肉重量の改善率

3%

従来比で大幅な削減

収益増加額（予測）

+40万円

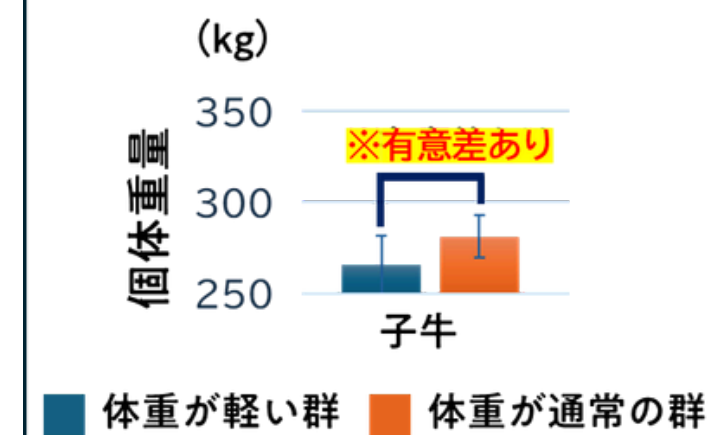
= これまでの機会損失

抱えている課題

- 一定の割合で身体の小さい子牛が生まれる
- 身体の小さい子牛は、肥育しても肉量が付きづらいため農家の悩みのタネ
- 飼料で改善したくても、検証にはコストもリスクもあり容易ではない

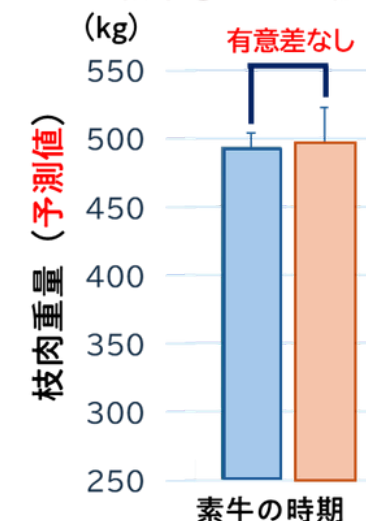
現状の課題

前提：
体重差で分けて子牛の飼育を開始
体重が軽い群のみ打ち手を実施



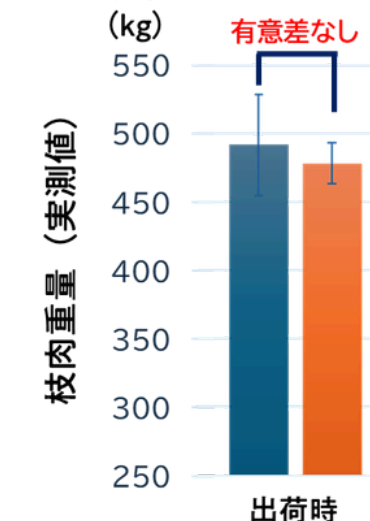
予測結果

結果①B-som診断



出荷時の実測値

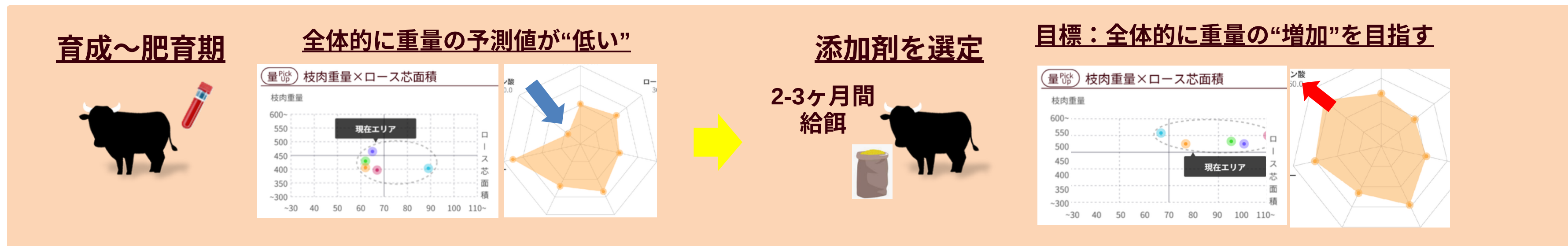
結果②出荷時の実測値



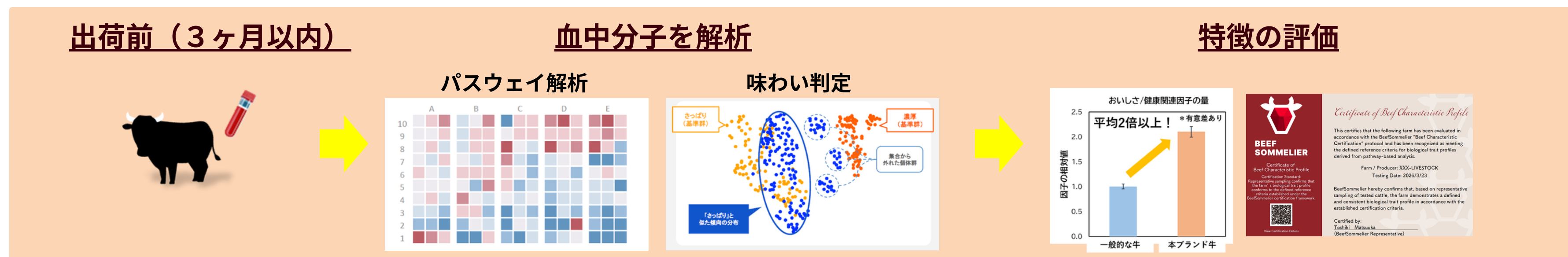
小さかった牛が、期待通りの肉量まで成長
→ 予測結果通り

③ JAと取り組み中

・ JAえひめ： 肥育予測結果から添加剤の検討および効果検証



・ JAひろしま、JAしまね： ブランド牛の差別化/高付加価値化



現在進行中の事業：見えない価値「味わい」を見える化

おいしさは「単一成分」ではなく「成分バランス」

「多数の成分が食味に関わっているため、個々の成分が食味に寄与する割合が小さくなり、結果として成分値と食味の因果関係の証明が困難になっていると推察される」

— 日本畜産学会報 96(1), 7-18, 2025より抜粋

高オレイン酸≠おいしい

- ✓ 高オレイン酸値: おいしいお肉になることもある
- ✗ 再現性の問題: 同じ飼料・同じ品種でも結果が異なる
- ⚠ 限界: 単一成分だけでは説明できないばらつきが生じる

特定成分から複合的な成分バランスへ

単一成分強調

オレイン酸 80%
その他 20%

VS

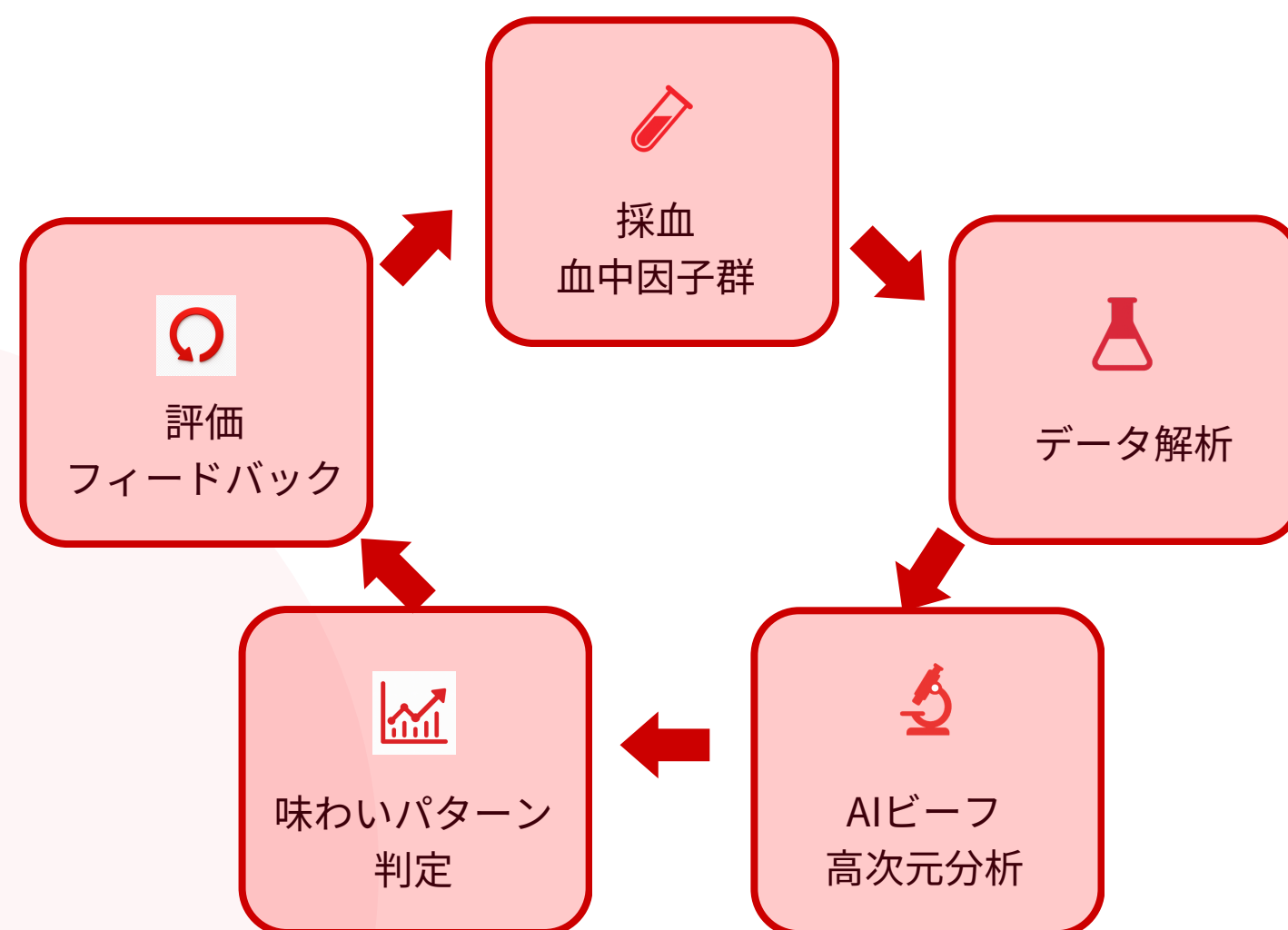
複合バランス

オレイン酸 25%
タンパク質 30%
その他 45%

現在進行中の事業：見えない価値「味わい」を見える化

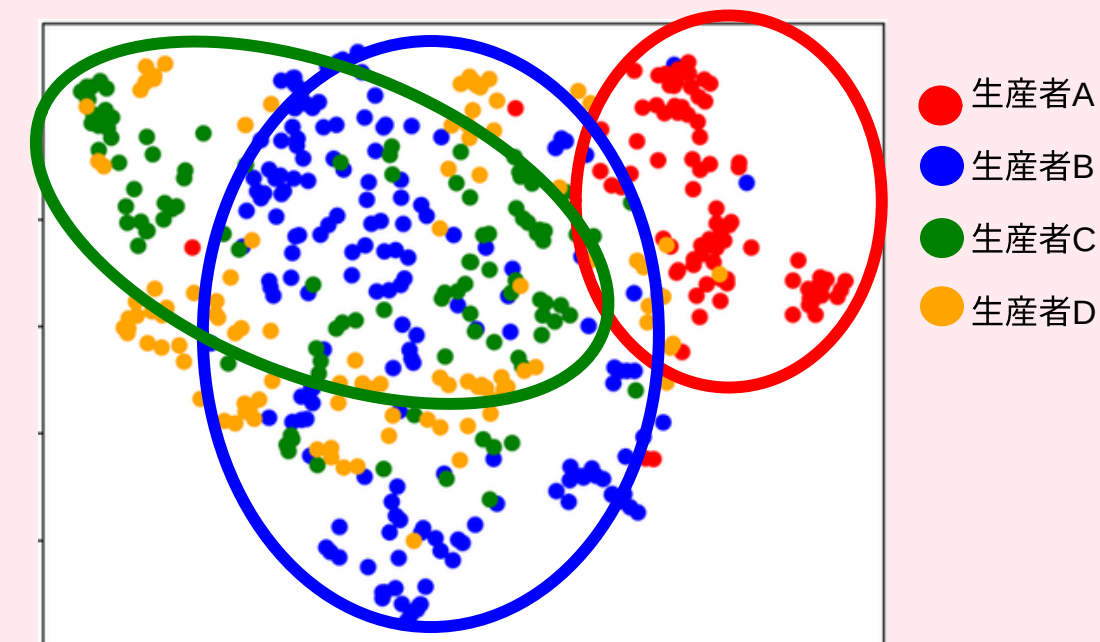
味わいを生体データから予測

- ✓ **再現性のある制御ループ**
個体差を可視化し、味わいパターンを明確にする
観測しながら調整する



AIビーフ技術によって、各牛を定量可能に

牛の個体差マップ



3つの味わいパターンを発見



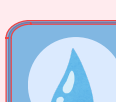
濃厚パターン

牛肉の深い味わいが
口の中に広がる感覚



さっぱりパターン

脂の融点が低いため、
口溶けの良さを感じる

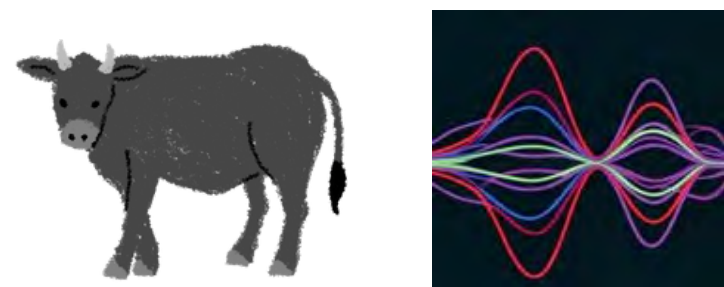


甘みパターン

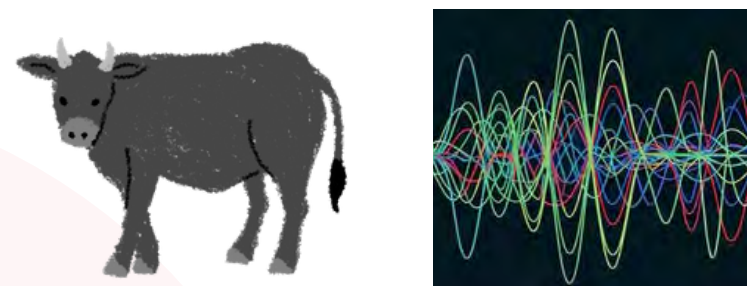
脂の甘い風味が口
の中に広がる感覚

持続可能な畜産業界への転換

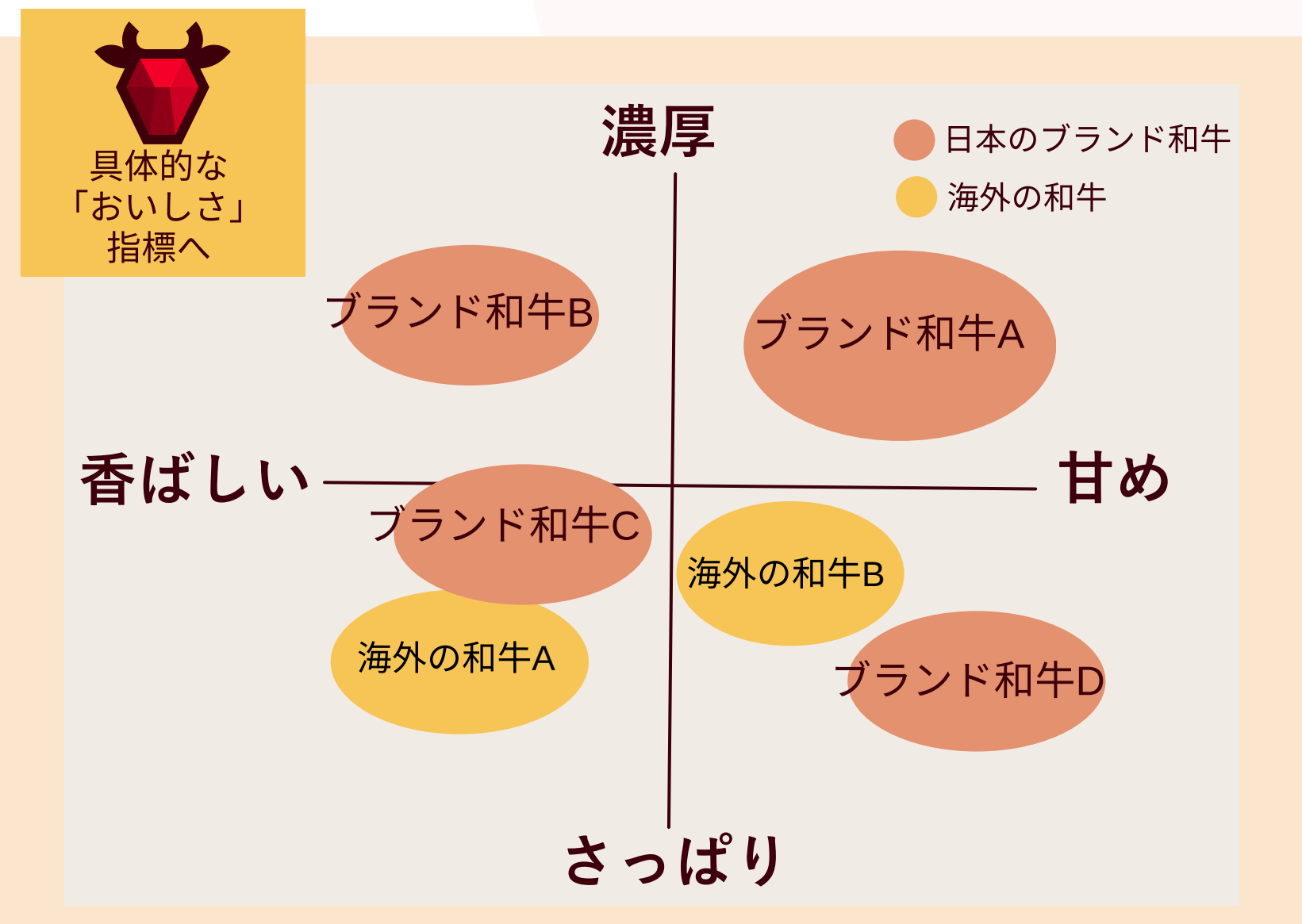
生体データを観察し、理想の味わいの牛肉へ



濃厚なお肉が欲しい場合、
濃厚パターンに近づくように牛を肥育



再現性・持続性の高いエコシステム



味わい・特徴・性質を明確にすることで
差別化や高付加価値化を実現！

すでに、内的データを使いたいという需要がある

ビーフソムリエのデータ基盤



牧場

運用中

- ✓ 飼料の最適化
- ✓ 肉質予測
- ✓ 牛群管理の高度化
- ✓ 生産コスト最適化
- ✓ 病気の早期発見
- ✓ 成長速度の改善
- ✓ 出荷タイミング最適化



飼料会社

運用中

- ✓ 飼料効果の科学的証明
- ✓ 新飼料の効果検証
- ✓ 飼料配合最適化
- ✓ 飼料ブランド差別化
- ✓ 牧場への提案データ



卸・加工業者

実証段階

- ✓ 仕入れ前の状態分析（特徴分析）
- ✓ 出荷牛の味わい分析
- ✓ 出荷牛の定量評価(安定品質)



内的データは、畜産業界全体を変革する「新しいインフラ」となる

1つの内的データ基盤から、複数ソリューションを展開

💡 単一プロダクト（SaaS）ではない

共通のデータ基盤から**複数事業を量産**するモデル

ビーフソムリエは、データプラットフォーム企業

Step 03 : 事業展開

事業量産

蓄積されたデータとアルゴリズムを各ステークホルダー向けに最適化

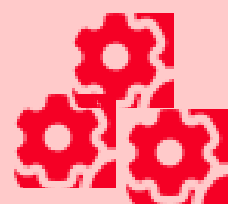
Step 01



データ蓄積

内的データ × 外的データ

Step 02



プロダクト基盤

解析アルゴリズム
API / UI コンポーネント



飼料効果検証

受託済み・即時ROI

運用中



牛群管理

飼養最適化・生産効率化

運用中



卸向け肉質予測

品質評価・仕入れ最適化

実証段階

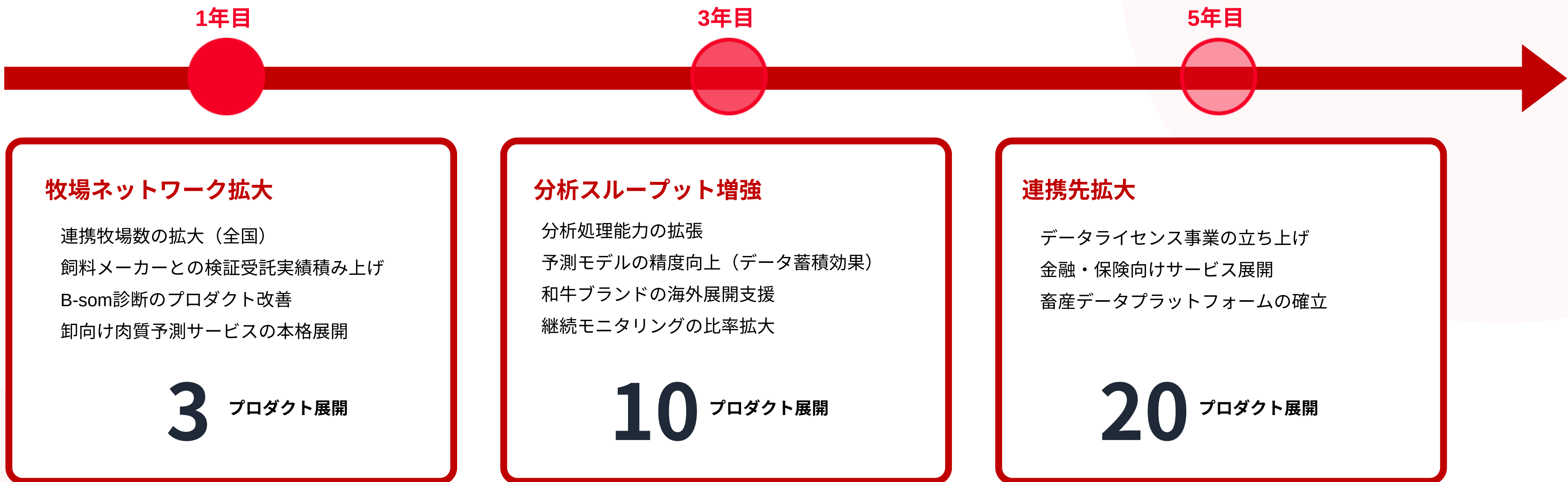


金融・保険

融資審査・保険設計

将来展開

ロードマップ： 需要が明確なVerticalから順番に展開



同一の「内的データ」基盤から、
畜産業界のあらゆるステークホルダー向けにソリューションを垂直展開

資金の用途：事業創出チーム構築



データはすでに
存在している



必要なのは
事業開発人材

調達資金で一気に事業をスケール



事業開発

飼料/卸/牧場など各領域におけるBizDev
スペシャリストを採用

各領域での事業量産およびパートナー開拓
を牽引



フィールドオペ

採血オペレーション、個体追跡、物流管
理の体制強化

データ取得インフラの確固たる構築およ
び安定稼働



データ運用

ラボ情報管理システム（LIMS）の構築
と運用

膨大な内的データのQA体制（品質管
理）の自動化・効率化



セールス & CS

導入済み顧客の目的達成に向けた支援と
フォローアップ体制の構築

アカウント拡大とクロスセル・アップセ
ルの推進

これまでの主な業績

受賞歴

- AgVenture Lab の起業家育成プログラム第1期「GROW& BLOOM」においてアグラボ賞(2024年11月)
- JAアクセラレータープログラム第7期において、イノベーター賞受賞 (2025年5月)
- 第60回 JSSA 札幌ピッチアワードにて、「最優秀賞・審査委員賞・スポンサー賞」を受賞(2025年6月)
- **JAアクセラレータープログラム第8期において、優秀賞を受賞 (2026年5月)**

メディア掲載歴

- 超異分野学会2025東京大会にて 登壇 (2025年3月)
- 農林水産省公式Youtubeチャンネルに九州農業week展示会の3社限定インタビューに出演(2025年5月)
- 食肉通信社の「企業最前線」への掲載 (2025年7月)
- **テレビ大阪系列/日経SP『これがマネーの最前線』にて全国放送 (2025年9月)**
- 農畜産業振興機構(alic)の畜産の情報に依頼記事を掲載 (2026年2月号)
- **NHK総合おはBizにて紹介 全国放送 (2026年2月17日)**
- **「A5を、いったん忘れてみる夜」@恵比寿にて牛肉の食べ比べ開催(52名動員)(2026年6月)**
- 九州農業week展示会にて農業新聞からの限定インタビュー (6月中に記事公開)

チーム：アルゴリズム分析からレポート納品まで一気通貫で対応可能

代表取締役 松岡 俊樹 Ph.D. MBA
近畿大学大学院生物理工学研究科 博士（工学）
グロービス経営大学院 MBA取得



取締役 松本 和也 Ph.D.
京都大学大学院農学研究科修了（農学博士）
近畿大学 名誉教授
近畿大学先端技術総合研究所研究員



池上 春香
検査ラボ主任研究員



西前 太揮
システム開発
主任研究員



佐藤 絵夢
コンテンツデザイン
& クリエーター



技術アドバイザー 加藤 博己 Ph.D.
京都大学大学院農学研究科修了 博士（農学）
近畿大学先端技術総合研究所 教授

事例 1

課題：毎月の出荷から、枝肉重量のばらつきは把握できているが、どの牛が平均以下の枝肉重量になるか早期には分からない。

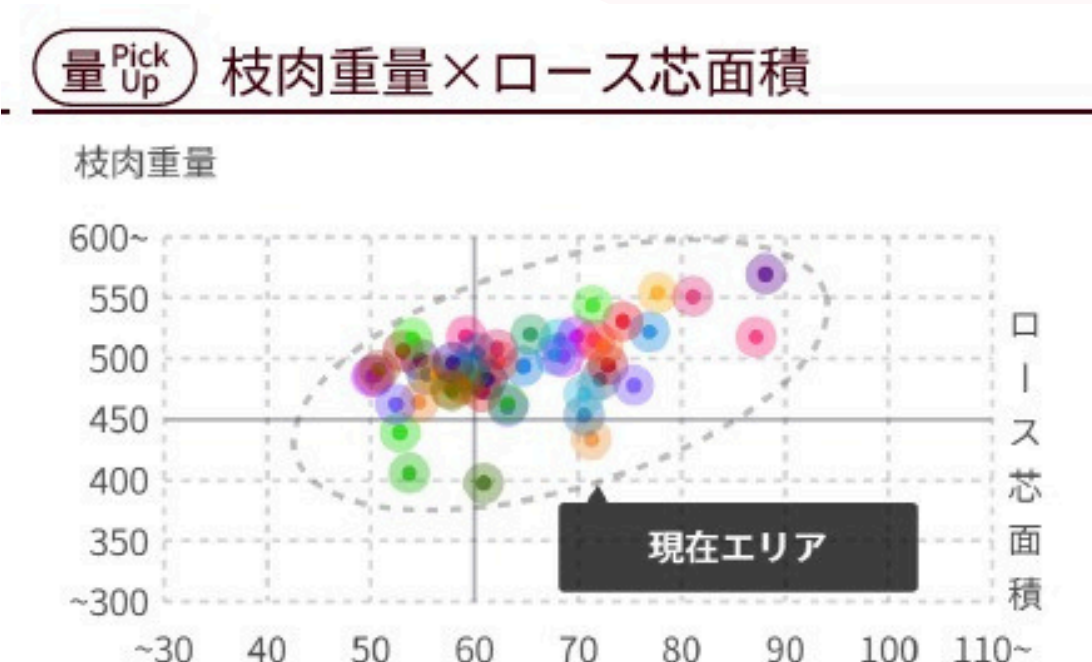
実施例：牛群の内50頭のマッピングを実施し、どれくらい売上げ増加が狙えるかを検討

内容：各種雄牛別の枝肉重量に関して、平均重量以下のものを平均重量値まで向上させることができた場合の売上げ増加見込み額

→ 約 1 2 0 万円の増加見込み
(去勢14頭：計約420kg、雌7頭：計約190kg (2,000円/kgで試算))

結論：

どの牛が将来の枝肉重量が平均以下になるのか予測できるため、これらの牛をまとめてケアすることで、120万円の売上向上を期待できることが分かった。



事例 2

課題：コスパよく利益を上げることができる血統の組み合わせの情報は、市場に出荷し枝肉成績が確定するまで分からない。そのため複数の血統の組み合わせを購入し続ける必要がある。

実施例：牛群の内50頭のデータを血統情報と合わせて解析することで血統パターン別に比較

内容：詳細は掲載不可

結論：最も安定的に利益を上げることができる血統の組み合わせパターンについて、どこの農場よりもいち早く知ることができる。従って、優先的にその子牛を狙って購入することで、飛躍的な利益向上に繋がる。